

次の文章は、筆者（「ぼく」）が子供の頃を回想した小説の、二つの部分です。【文章Ⅰ】は小学五年生十月の学芸会当日から十二月までを、【文章Ⅱ】は翌年一月のある日を、それぞれ描いています。読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

午後の真ん中へんがぼくの出る劇「三年寝太郎」だった。演出の*小林先生は大学の頃になにか演劇関係のサークルに入っていたようで、舞台の作りかたからしてとても凝っていた。それはリハーサルのとくにだんだんわかってきた。まず、いままでの学芸会の劇と照明がぜんぜん違っていて、夕方とか朝などが本当のような色合いになり、ぼくはそれだけで感動してしまった。さらにカラスの鳴き声とか遠くの村祭りの太鼓や笛の音などもそれ用に作られたものを借りてきてあって、その操作は裏方の児童がやっていた。

シャックリのマヌケな大男役のぼくは一時間前から顔に化粧され、顔全体は土色に、頬などは、まいったなあ、と思うくらい丸く塗られ、その上にもすごく大きな黒いテンテンをつけられ人間テントウ虫みたいにされた。最後に手拭いで頬かぶりをすると、自分でも誰だかわからないような顔になっていたからへー1〜気持ちあまりなくなっていた。

最初の頃は新聞紙で作られていた体を大きくするためのヨロイみたいなものもボール紙で同じように自分たちで作った。これはけっこう難しく三人の裏方の友達が手伝ってくれた。その上に古い敷布に色を塗って野良着みたいにしたのをAハオリ、高下駄を履くと学年でぼくが一番せいたかノツポでもあったので自分でもへー2〜くらいの大男になり、小林先生に言われたように全身を大きく上下にゆすりながら「ギョツ」「ギョツ」と大声をだしてシャックリをする。その恰好で歩いてみると、ほかの出演者や裏方がみんな手を叩いて笑った。

ぼくは、寝てばかりいて悪がしいいコトばかり考えている寝太郎がつかまってむしろBマきにされ、川に流される運命となり、二人の農夫に担がれてくるタイミングで舞台そででスタンバイしている。担がれながらも寝太郎はうまいことを言って担いできた二人を金のあるところに行かせ、農道にいったん下ろさせることに成功し、寝太郎はその隙になんとか逃げられないかと考えている。そこにぼくが出ていくのだ。

「暗い道は何も見えなくてあぶねえなあ」などと言いながら例の体の上下を大きく動かす「ギョツ」をやる。

最初の「ギョツ」で多くの観客が笑い、その笑い声に最初はぼくが圧倒されてしまった。寝太郎とのセリフのやりとりはちよつとだけあるのだがぼくは短いセリフを言いながら「ギョツ」のほうもやらねばならずⅡなかなか忙しい。

「ギョツ」は観客も期待しているらしく笑い声はますます大きくなっていき、寝太郎のセリフが笑い声で観客に聞こえないくらいになった。

ぼくはたいへんいい気分になり、演劇って面白いものだなあ、と思った。その劇はその日一番面白いという評判になり、終わったあと小林先生は出演者や舞台の裏で手伝っていた裏方児童全員に一本ずつ、子供ではなかなか買えないバヤリースオレンジをふるまってくれた。

けれど、家に帰って①そんな話を家族に楽しく聞かせるわけにはいかなかった。臥せっていることの多かった父の具合が日に日に悪くなっていったからだ。往診してくれた医者が入院をすすめたが、へ3へ父にはその気持ちはなく、医者の往診があるときだけ底力を出していつもより元気そうにしているのよ、と母は困ったような顔をして兄や姉たちに話していた。

秋がすぎ、冬になると父はもう布団から起きることもなくなり、ぼくや弟は家にいるときは大きな声をだしてはいけない、と言われていた。

父の病気は当初重い「肺炎」と聞かされていたが、それだけではなくおおもとは結核のようだった。それは下の子供たちには知らされていなかった。本格的な冬に入ってから嫌な響きのする咳が続き、苦しそうだった。子供心にも父は重い病気にかかってしまっているのだ、ということがわかってきていた。

【文章Ⅱ】

葬儀から一週間ぐらいたした土曜日の午後突然小林先生がやってきた。

恐縮している母に、少し話をしたいと思いましてね、とⅢことわり、ぼくは客間で先生と向かいあった。

小林先生は少しだけ笑顔を浮かべ、「いろいろたいへんだったなあ」と最初に言った。

ぼくは先生が家にやってきた理由がまだよく分からず、あいまいにうなずいた。たしかに家族を見ていたいへんな一週間だったけれど、父は長いこと自由に歩きまわることもできない病人でもあったので、交通事故で急に他界したわけでもないからある程度覚悟みたいなものはできていた。でもそれを言うのはへ4へようだったので黙ってまたうなずいた。

先生は、ゆつくりした口調でいろいろな話をした。世間話のようなものから父親が早くに亡くなってしまったけれどがんばって立派な仕事をなしたとげた人の話など、いろいろだった。

早くにお父さんを亡くしてしまうという辛いことを乗り越えていかなければならない状況にも直面するけれど、今しっかりと前を向いて進んで行けば、これまでと変わらず君の人生は前途へ5へことを忘れないように。

そういう話をいろんな方向からしてくれた。話は一時間ぐらい続いたが、ぼくはずっと聞いているほうが多かった。ぼくがあまりにもシンとして聞いているので先生はどうもこれではまずいと思ったのか、話を急に変えた。笑い顔が少しまじっていた。

「それにしても去年の秋の学芸会『三年寝太郎』での君の活躍は素晴らしかったね。職員のみだでも話題になっていたからね。ああいうのを主役をすっかり食ってしまった、というんだよ。Ⅳしてやったり、とぼくも思ったからね」

あの劇の練習から学芸会当日までいろんな事があつたけれどぼくは劇の練習をすることに集中している時間が嬉しかった。家で臥せっていることが多くなった父の力のない咳を聞いてシンとしている日々から逃れられていた。父の具合が悪いということは先生にも言わずにいた。言えば心配してぼくはあのマヌケな大男の役からはずされてしまうかもしれない、と思つたからだ。

本当は父が元気になって、あの学芸会に母と一緒にきて貰いたかつた。でもあの日、家からは誰も来ることができなかつたし、^②そういう話をぼくもしなかつた。

母が新しいお茶をいれ、お茶菓子を持ってきたところで、小林先生はえらく恐縮して「これをいただいてもう失礼しますので」と少し腰を浮かせて言つた。

ぼくたちの動きを察したように庭で犬のジョンがガサゴソ動き、小さく鳴いた。

(椎名誠『家族のあしあと』)

【注】 * 小林先生……「ぼく」の担任でもある若い男の先生。五学年全体で作る劇を担当し、重要な役に「ぼく」を選んだ。

(一) —— A・Bのカタカナを漢字に改めなさい。

(二) へ 1 ㄣ へ 5 ㄣ を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～ソより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア	多難な	イ	無責任な	ウ	底知れない	エ	お茶をにごす	オ	堂々としている
カ	頑固 <small>がんこ</small> な	キ	生意気な	ク	もどかしい	ケ	もったいぶる	コ	洋々としている
サ	冷静な	シ	真面目な	ス	恥ずかしい	セ	びっくりする	ソ	歴然としている

(三) Ⅰ～Ⅳのここでの意味として最もふさわしいものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I 凝っていた

ア 工夫していた
イ 片寄っていた
ウ 気負っていた
エ 謎なぞめいていた
オ 目立っていた

II なかなか

ア かえって
イ 簡単には
ウ どうしても
エ 思った通り
オ 予想以上に

III ことわり

ア おわびを言い
イ わけを説明し
ウ お茶を遠慮えんりよし
エ お悔やみを述べ
オ 席を外してもらい

IV してやったり

ア どうか切りぬけた
イ 主役を支えてあげた
ウ 上手にごまかされた
エ 期待通り演じ切った
オ 教えたかいたがあつた

(四) ① 「そんな話」とは、どんな話ですか。三十字以内で説明しなさい。

(五) ② 「そういう話」とは、どんな話ですか。二十字以内で説明しなさい。

(六) 筆者の心境の説明として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 【文章Ⅰ】では学芸会の晴れ舞台を懐かしみ、【文章Ⅱ】では小林先生とのやりとりを通して、父の死という、あまりに突然の出来事を受け止めかねていた「ぼく」を、我ながら痛ましい思いで見つめている。

イ 【文章Ⅰ】では先生や友人との活発なやりとりを描き、【文章Ⅱ】の、小林先生や母の話にもほとんど言葉を返せなくなってしまう様子と比べて、当時の複雑な心境がよみがえり、いたたまれなくなっている。

ウ 【文章Ⅱ】で父の死にも動揺せず、小林先生の話落ち着いて聞いている「ぼく」を、【文章Ⅰ】で舞台作りやジュースに興奮している「ぼく」と比べ、急に大人になってしまったことを切なく思っている。

エ 【文章Ⅱ】で小林先生の話をつっかけに、【文章Ⅰ】の頃の胸中を「ぼく」自身が改めて理解してゆく様子を描き、「ぼく」をそつと気づかいながら劇に打ちこませてくれた小林先生に、改めて感謝している。

オ 【文章Ⅰ】で劇の指導に熱中する小林先生を描き、【文章Ⅱ】ではその先生に、「ぼく」を役から外した方がよいのではという迷いのあったことを明らかにして、むしろ救いになった大役をありがたく思っている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二、三年まえ、私は、三冊の本をもって、四歳何カ月かの男の子のある家にいったことがある。二冊は、日本語の本であり、一冊は英語の本で、日本語の方は、おみやげであり、英語のは、ただ見せてもってかえるつもりであった。

男の子は、いつも私から本をもらいAつけていたから、私が包みから本をだすと、さっそくにここにこしてやってきて、お話を読んでもらう時独特の顔で、「ふん、ふん」とあいづちをうちながら聞きだした。

一つの本がおわると、すぐまた一つをとりあげて、「こんどは、これ」といった。

三冊読みおわって、私が英語の本をしまいかけると、その子は、びっくりして、

「どうして、それ、しまっちゃうの？」と聞いた。

「だって、これ、英語だから、おいていっても、^①読めないから。」

私がいようと、その子は正直にI心外だという顔をして、その本をめくり、絵と私の顔を見くらべて、

「ぼく、ほら、^②読めるよ。ほら、読めるよ」といった。

そこに描かれている絵は、その子に全部読めたから、私が読めないというのは、その子にしてみれば、まちがいだったのである。

幼児にとって、絵は、おとなの文字——つまり、考えたり、感じたり、感じたり材料になつてくれるもの——であり、または、それ以上のものかもしれないということ、その時ほどはつきり見せつけられたことはなかった。

その男の子は、四歳にもなっていたから、もうかなりなまいきなことでもいい、じぶんでは、字が読めなかったけれど、おとなの世界には文字があることは十分に承知していた。その子にとってさえ、絵がよい場合、文字はこれほどII勘定にはいらなかったのである。

それから、まもなく、この子よりずっと幼い子どもと絵本の関係について、かなりはつきり知らされたのは、二年ほどまえ、デンマークのブルーナというひとのあらわした「ちいさなうさこちゃん」という本のシリーズを訳したのちのことだった。このシリーズは、私が翻訳した外国の絵本のなかでも、一ばん年少の子どものための本で、絵は単純明快、ことばも、まだIIIほんとのストーリーを

形づくらない、うたのようなものだった。

このシリーズ八冊ができた時、私は、これを、私の家の子ども図書室、「*かつら文庫」の本棚の上にならべた。私たち、この文庫のせわをするおとなは、新しい本をだす時、よくこうして、本をだまっておいて、子どもの手のだしぐあい、その本が、どのくらい子どもの興味をひくか、ひかないかを見ようとする。

おどろいたのは、ブルーナの本は、三、四歳の子から、小学六年生までが、文庫にはいつてくるBなり、手にとったということだった。

③この吸引力が、まず私たちに、この本はよく勉強してみる価値があることを教えてくれた。

この本が出てまもなく、ある若い女のひとが、生後八カ月の甥に、「うさこちゃん」の本を贈ったという話をしてくれた。「おもしろいですよ。じいとおとなしく見ていて、読んでやると、だまってきいているんです。またページをくると、またじいとして、聞いているんです。」

私は、何ほ何でも、八カ月では早すぎると思ったが、だまっていた。

私が早すぎると思ったのは、おそらく、その子は、うさぎも見たことがないだろうし、読んでやることばもわからないだろうし、ちんぷんかんぷんのことを与えられているのではないかと、IV 懸念したからだが、だまっていたのは、その子は、案外、それを喜んでいたのかもしれないし、またもう少ししたら、その後のようすを聞いてみようと思ったからだ。

ところが、それから、数カ月して、べつの女の人、ある若い母親が、「おもしろいことを見せる」といって、小さいむすめ（十一カ月）をつれてきた。

若い母親は、五、六人のおとなの間に、その女の子をおき、「うさこちゃん」のシリーズのなかの「さーかす」を、その子のそばにおいた。

すると、その子は、その本をもって、すぐわきにいた父親のところにはって行って、ひざにつかまって、父親の顔を見あげた。父親は、その本を読みはじめた。

この本では、右のページが色ずりの絵になっていて、左のページに四行のうたがついている。十一カ月の子どもは、四行の文字を読むあいだ、集中できない。一行ほど読むと、ページをめくれと催促する。

こうして、「さーかす」の最後のページまでくると、赤ん坊は、その本をもって、となりのおとなのところに行って、また読めというしぐさをした。こうして、そこにいるおとなに全部読ませてから、この子は満足して坐りこんだ。これが、この子の、にいちゃんのまねをはじめた、夕食後の日課なのだそうであった。

それから五カ月（その子一年四カ月）して、その母親に、あの行事は、まだつづいているかと聞いてみると、その子に読んでやる文は、だんだんなくなっていて、ある日、

「おんがくたいも せいぞろい

あおいぼうしに あおいふく」

のところに来たら、突然、「ぼち！」といって、絵をゆびさしたという話をしてくれた。

その子にとっては、帽子は、外出のたびに、かならずかぶせられる、外出とは切っても切れない関係にある、とくべつ意味のあるものだったそうだが、その子はそれを、絵のなかにある「ぼち」と同種のもので認識したのであった。

この一連の話を聞いて、私は、④八カ月の子どもに、その絵本ははやいななどということはいわないでよかったです。

この幼児たちにとって、この絵本は、最初、何かおもしろい形がはつきりした色で描かれていて、それを手にすると、身辺のおとなが何か節をつけていってくれるもの——つまり、形と音とがともなったものであったにちがいない。そして、それをくり返し、読めとせがんだのは、それが⑤快い経験であったからにちがいない。

描かれているものや、読んでもらうことが、ちんぷんかんぷんであっても、幼児のまわりには、現実には、ちんぷんかんぷんのことであって、そういうものにぶつかっていきあいに、子どもは知ったり、発見したりして喜ぶのにちがいない。

それにしても、人間に絵が読めるということは、なんという素晴らしいことかと、私は思った。犬や鳥は、目や耳があんなに鋭敏なのに、絵はわからない。犬や鳥は、色をつかっているのを見ても、そこから何のいみもくみとれない。けれども、一歳二、三カ月の子どもは、「ぼち！」を認識する。

そして、その子は、現実に見たものを、頭の中でもう一ど、vそらで組み立てる作業——どんなほかの動物もできない作業——を、どんだん頭のなかでつみ重ねていって、やがて、現実の形や絵、いまのはやりのことばでいえば、イメージの力をかりないでも、イメージを思いうかべることもできれば、そこから進んで抽象観念にまで到達することができる。

そして、その作業は、けっして学校へいって、勉強といわれるもののはじまってから、はじまるのではなくて、生まれるとまもなく、その第一歩の活動がはじまっているのだということは、子どもたちを見ていると、いやでも教えられないわけにはいかない。

(石井桃子「子どもにとって、絵本とは何か」)

【注】 * かつら文庫……一九五八年、筆者が東京都杉並区荻窪おぎくぼにある自宅の一室に開いた、子供のための図書室。児童書がまだ

少なかった時代に、約三五〇冊の蔵書と自由に読める場所を提供し、貸し出しも行った。二〇〇八年に筆者が亡くなった後も、その志を継いで活動が続けられている。

(一) —— A 「つけ」、—— B 「なり」を、本文と同じ意味で使っているものを、次のア、オよりそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----------|---|----|---|-------------|
| A | つけ | ア | 備えつけの家具 | B | なり | ア | 何でも言いなりになる |
| | | イ | 聞きつけない言葉 | | | イ | 自分なりにやってみる |
| | | ウ | 胸に刻みつけた | | | ウ | 一目見るなり泣き出した |
| | | エ | 急いでかけつけた | | | エ | 座りこんだなり動かない |
| | | オ | 何かにつけて言う | | | オ | 大なり小なり成長がある |

(二) ~~~~~ I〜Vのここでの意味として最もふさわしいものを、次のア〜オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I 心外だ

ア 自分勝手だ
 イ 驚かせたい
 ウ 話にならない
 エ とんでもない
 オ 思った通りだ

II 勘定

ア 手
 イ 耳
 ウ 考え
 エ 視界
 オ 予定

III ほんとの

ア 物語としての
 イ 原作者らしい
 ウ 現実味のある
 エ 原書の通りの
 オ 実話に基づく

IV 懸念した

ア 注意した
 イ 確認した
 ウ 想像した
 エ 提案した
 オ 心配した

V そらで

ア 最初から
 イ 自分一人で
 ウ 節をつけて
 エ 実物なしで
 オ ぼんやりと

(三) ——— ①「読めない」、———— ②「読める」という二つの表現において、「読む」とは、絵本の中の何をどうすることを意味していますか。「読む」という言葉を使わずに、それぞれ十五字以内で説明しなさい。

③ 「この吸引力」とは、何の、どのような力ですか。三十字以内で説明しなさい。

④ 「八カ月の子どもに、その絵本ははやいなどということをおいわないでよかった」とありますが、筆者はなぜそう思ったのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア うさぎを見たことがない幼児でも、絵の中に何か好きなものを見つければ、そのシリーズを楽しめることを教わったから。
イ 形から読みとるといふ、人間にだけ与えられている力は、小学校に入る前に鍛えなければならぬと気づかされたから。
ウ 長時間話を聞くことのできない幼児も、「さーかす」だけは、親のいない時に一人で楽しんでいることを教わったから。
エ 絵本を毎日読んでもらっていると、一歳前の幼児も、文字を認識して抽象思考にたどりついている様子を目にしたから。
オ 絵を手がかりにしてもと言葉を結びつけ、観念を作り上げてゆく作業は、生後すぐに始まっていることを理解したから。

⑤ 「快い経験」について、どういうことを「快い」と言っているのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 幼い子供が、兄や姉のまねをして父や母に絵本を渡し、ページをめくってもらいながら色や形をながめる、ということ。
イ 若い親が、我が子の喜びそうな絵本を何冊か選んで並べておき、子供にせがまれるたびに読んで聞かせる、ということ。
ウ 幼児が、絵をながめながらそれに合わせた声を聞き、そのくり返しの中で、少しずつものを認識していく、ということ。
エ 幼児が、文字を読めないうちから大人の音読を毎日くり返し聞くことで、認識できる言葉を増やしてゆく、ということ。
オ 大人が、様々な本を手にする子供達を観察することで、他の動物の持っていない素晴らしい力を実感する、ということ。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かつては東北の方言と九州や沖縄の方言はまったく異なっていて、互いにコミュニケーションをとるのも困難でした。共通語を全国に浸透しんとうさせるには長年の努力が必要でした。日本人だから最初から同じだったわけではなく、^Aキンシツな日本人を「つくる」必要があったのです。

アメリカの政治学者のベネディクト・アンダーソン（一九三六～二〇一五）は、国民国家は古くから変わらず存在したわけではなく、近代化の過程で想像される共同体としてつくりだされてきたと述べました（『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』）。国境に囲まれた土地に住む国民というまとまりを私たちがあたりにまよえに思えるようになるには、国の中心から発信される出版などのメディアの発達、国語の成立や辞書の編纂へんさん、全国統一の国民教育など、^①さまざまな仕組みによって、その「想像の共同体」を支える必要があったのです。

もちろん私たちの実感レベルでは、日本人には古くから固有の文化があり、日本人らしい性質がずっと昔から維持されてきたというイメージがへー1ーです。それが想像の産物にすぎないなんて言われると、いやな気分になる。「わたしたち」の存在が否定されたような感じがします。それは「わたしたち」の存在の輪郭りんかくを維持したいという思いがあるからです。

でも、その輪郭の連続性を支えているさまざまな「日本文化」には、最近になって一般化したり、海外に由来したりするものが少なくありません。^Bキヌの着物も、瓦屋根も、畳の間も、一般庶民の生活に浸透しはじめたのは明治以降のことです。綱引きや火祭り、お盆や節供せつこうなどの年中行事には中国大陸や朝鮮半島の文化と共通するものがたくさんあります。

それは日本人が外来の文化をうまく変形しながら取り入れるのに長けていたからだ――。そんな声が聞こえてきそうですが、それはかならずしも日本人だけに限られた現象とは言えません。

歴史学者のエリック・ホブズボーム（一九一七～二〇一二）らが編集した『創られた伝統』は、一九二〇世紀にかけての欧米やその植民地の研究事例をもとに、さまざまな国や地域の「伝統」が長い年月を経たものではなく、ごく最近になって成立したり、ときに捏造ねつぞうされたりしたものだという、ショッキングな指摘をしました。「伝統というものは常にへー2ーにつじつまのあう過去と連続性を築こうとするものである」。ホブズボームは^Cジヨロンにそう書いています。

一五〇年前といまの日本人の暮らしは、まったく違います。しかも一五〇年前の日本列島に暮らした人びとは、もうだれ一人残っていません。日本人は、みんな入れ替わっている。それでもなお日本人や日本文化はずっと続いている。そんな意識が私たちにはありま

す。

学生に「日本文化とは何ですか？」と聞くと、みんな同じように答えます。着物や華道、茶道、相撲、歌舞伎、侍、侘び寂び……でも、教室に着物を着ている人は一人もいません。ふんどしをつけている人も、歌舞伎役者も、ちよんまげ頭の人もいません。

だれもその「日本文化」にあてはまらなくても、それらが日本人の固有の文化だと信じて疑わない。不思議なことです。もともと武士階級の侍なんて、全人口からみればごくわずかでし、庶民はキヌの着物を身につけることが禁じられていました。極端な話、いまも昔も一部にしか存在しなかった要素であっても、日本人の文化だと考えることは可能なのです。

「日本人」というのは「器」であって、何がその「なかみ」として差異を構成するのかが時代によって変化します。そうしてなかみが変わしても、日本人という容器、つまり境界そのものは維持される。それは日本人ではない人たちとのあいだに境界線が引かれているからです。

もし世界中に日本人しかいなかったら、「日本人」というカテゴリー（＝容器）に意味はなくなります。「日本人」は、「日本人ではない人たち」との関係においてはじめて「日本人」でいられるのです。

さらに「日本人」という境界は、つねに存在する（3）なものではありません。たとえば、私たちはよく関西人はどうか、関西人のなかでも京都人はこうで、大阪人はこうだといった言い方をします。そのとき「日本人」としてのまともには無視されます。

「関西と関東は文化が違う」と言うとき、そこに明確な差異があることを疑う人はいません。その関西人と関東人の比較では、京都人と大阪人の違いは意識されなくなり、同じ関西人としてキンシツな存在にされます。どういう境界線で比較するかで、「差異」そのものが変わるのです。

集団と集団との境界をはさんだ「関係」が、その集団そのものをつくりだしていく。「つながり」によって集団間の差異がつけられ、集団内の一貫性が維持される。

ある輪郭をもった集団は単独では存在できません。別の集団との関係のなかで、その差異の対比のなかで、固有性をもつという確信が生まれ、それが集団の一体感を高める。それは、「わたし」が「他者」との交わりのなかで変化してもなお、「他者」との境界線をはさんで「わたし」であり続けるのと同じです。

他者との差異が集団としての一体感や持続性を生み出すように、「わたし」という存在の輪郭も、ひとつの感情や身体経験をひとまとめしておくために必要とされます。他者と交わることで輪郭が溶け出して交じり合ってしまうからこそ、その輪郭を固める【D】ソウチが必要とされるのだと言ってもいいかもしれません。

精神科医の木村敏（一九三一〜二〇二一）は、*統合失調症は「わたしがわたしである」ということに確信を持てなくなつたときに生まれる病気だと言います（『自分ということ』）。「わたし」という存在の感覚は、だれにとつてもあたりまえに感じられるもので

はなく、それが失われることもある。私たちはその輪郭を維持しないと、とても生きづらくなるのです。

「わたし」の輪郭を維持する。そのことを身近な例に引きつけて考えてみましょう。たとえば、杖つえを使って歩いている人にとって、杖は身体の一部のように感じられるはずですが、メガネをかけているとき、そこで「見ている」のは「メガネ」ではなく、「わたし」だと思っているのも同じです。「わたし」の眼だけでは見えていないにもかかわらず、見ている「わたし」がはっきりと感じられる。

道具を使うかどうかだけではありません。私たちは音を自分の耳で聞いていると感じます。でも当然ですが、その音の振動を伝えているのは空気です。空気がまわりに充滿しているからこそ、音が届く。音はそれを発するものの振動とそれを伝える空気の振動、その震えを知覚する耳という身体器官との協働作業をとおして、「聞こえる」わけです。でも経験のレベルでは、「わたし」が聞いているとしか感じられない。

そもそも②「わたし」の経験は外部の世界へと拡張しながら、それらとの交わりをとおして構成されている。私たちのへ4～な境界は、つねに外部の「わたし以外のもの」と連動する開かれたものなのです。それでも、ふつうは「わたし」をしっかりとした輪郭のある独立した存在として経験できる。考えてみると、けっこう不思議なことです。
(松村圭一郎『はみだしの人類学』)

【注】 * 統合失調症……思考や行動、感情をまとめていく力が低下する病気。

(一) — A/Dのカタカナを漢字に改めなさい。

(二) へ1～へ4～を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～クより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | 内面的 | イ | 画一的 | ウ | 絶対的 | エ | 身体的 |
| オ | 一般的 | カ | 現実的 | キ | 歴史的 | ク | 主体的 |

(三) —— ① 「さまざまな仕組み」には、どのような目的がありますか。空白行ではさまれた段落（一五〇年前と同じです。）をふまえて、四十字以内で説明しなさい。

(四) —— ② 「『わたし』の経験は外部の世界へと拡張し」について、このこと具体例として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 病気で苦しんでいる時、体を通常時より重く感じることがある。
- イ 靴をはいて泥をふんだ際に、地面の感触を得ることができる。
- ウ 偉人の伝記を読むと、その人の人生が実感とともに理解される。
- エ 怪談話を聞いた後は、夜に幽霊ゆうれいが出るような気がしてしまう。
- オ ものを口を含むと、味だけでなく、食感や香りまで理解できる。

(五) 本文の内容として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 集団や個人は、差異による対立を生まないよう、周囲と協同することで自他の輪郭をあいまいにする、戦略的な存在である。
- イ 集団や個人は、どのような比較であつてもただ一つの同じ性質を感じなければ自身の輪郭を感じられない、危険な存在である。
- ウ 集団や個人は、あらゆる変形を受け入れ、周囲との関係をもとにその都度自身の輪郭を規定していく、流動的な存在である。
- エ 集団や個人は、周囲を参考にしながら古くからの文化や経験をもとに少しずつ自身の輪郭を形成していく、孤独な存在である。
- オ 集団や個人は、積極的に固有性を主張することで周囲との違いを明確にし、自身の輪郭を補強する、身勝手な存在である。

